三家考

下

兜

和書門
類
三五四三八號
一七一函
一〇架
三冊

内閣文庫
和
三五四三八號
三冊
一四九函
一八架

史
料
備
210

内閣文庫		
番號	和 35438	
冊數	3(3)	
函號	149	89

共三

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

閣21-0

攝州多田院御家人由緒書曰源満仲公相州鎌倉ヨリ攝州多田庄ニ至リ玉フ康保五年二月満仲公住吉江参籠ニ付神託有ニヨツテ初テ多田ニ居館ヲ経営アツテ移住也則此所ヲ新田ト唱フ然外ニ御家人ノ屋敷地ヲ足皆是ニ居住ス是等ノ輩ニ領地ヲ賜フ其分多田庄能勢郡并他国ノ内ニモ所在ス故ニ源家代々御教書ヲ被成下安和元年ニハ満仲自ラ木像ヲ作リ大願ヲ発シテ曰於我滅後末世擁護朝家武家三宝

降伏諸魔故没後廟所ニ一ツノ不思儀有之ハ此願成就セシトナリ翌二年法花三昧院建立今多田院ノ儀号ヲ鷹尾山廟所寺寛和二年八月十五日法花三昧院ニテ七十八歳ニテ出家仕玉フ多田院満慶ト法号セリ此時御家人ノ老臣等廿六ニ出家シテ近仕ス長徳三年八月廿七日ニ寿八十六歳ニテ薨逝ス末期ノ記文曰吾没後神留此廟窟可守弓矢家加之以當院鳴動可覧四海安危者也御家人等ハ有遺言則御自作ノ甲冑帯劔ノ尊像ヲ備宝殿神祭其後鳴動度々ニシテ令知日本之善悪古者鳴動ノ毎度令奏聞由記録シ其時日ヲ書記セリ多田御家人等多田庄能勢郡ノ領地ノ内ニ一城ヲ搆エニノ御社ヲ守護ス先例ハ禁裏ヨリ守護番等ヲ被置タリ

新田政所原卿政所ト申御家人ノ内ニテ政所ヲ立置此儀多田院ノ舊記数通ニ悉載セタリ且又三河国ノ内ニモ御家人ノ領地在之ニ付新田政所

新田五郎家氏三州ニ來住ス其節上津村兵ア亟福武三州八橋ノ杜若ヲ取飯多田ニ植置テ今ニ栄茂ス

詣曰三州八橋ニハ杜若絶タル所ニ爰ニ所在哥ナリト

信長ノ代ニ御家人ノ内塩川伯耆信長御旨ニ叶フ

恵ノ字
可疑

詣曰塩川伯耆守恵政ヲ専ラニスト信長是ヲ感賞シテ金銀ヲ賜ト將軍家譜ニモ載タリ此儀ハ伯耆守カ娘ヲ信長妾トシテ寵愛ス最伯耆モ諂多故ナリト

故ニ威勢ヲ振テ多田ノ御家人等ヲ手下ニ付ント企ル然トモ皆不相随ニ付面々威ヲ失ヒテ居タリ

詣曰塩川此時能勢郡能勢一黨ノ者共トモ矛楯シ信長ヘ申立其所領ヲ奪此時西能勢ノ嫡流皆断絶ス則能勢ノ領地多田ノ庄モ塩川知行ス

然ル所秀吉ノ代ニ及テ塩川伯耆知行召放サレシ節多田ノ社領并御家人等知行被召上

詣曰天正十三年大和河内紀伊ヲ大納言秀長ニ賜時和州旌頭筒井伊賀守ヲ伊賀ヘ所替セシメ古来ヨリノ大和国人ノ皆秀長ノ家人ニ被付秀長ノ跟息中納言秀俊早世シテ其家断絶ヲ以カノ大和ノ国人モ秀俊不幸ニ連テ所領ヲ失フ攝州ノ儀モ信長ノ代ヨリ能勢郡多田ノ庄ヲハ塩川伯耆守領地ト成ヲ以塩川所領ヲ被召上ニ付テ此辺皆没収地トナリ各所領ヲ失フ

依之浪〻ノ御家人等ハ秀吉ヘ恨有者トモニツキ
大阪御陣ト成刻ハ渠等御當家ノ御手下ニ参
上可仕ト冬ノ御陣ノ刻攝州中嶋迄出張仕シ処ニ
此趣大阪ヘ相聞ヘシカハ多田ノ銀山奉行方ヘ秀
頼ヨリ被命多田御家人等ノ兵具ヲ不残被
召取候翌夏御陣ニハ大阪方ヨリ銀山ニ伏勢三
百余人有之由聞附テ意恨旁以是ヲ討取御忠
節ニ備ントテ元和元年五月六日彼方迄馳向処
翌七日大坂ヨリ後巻ニ逢テ大方討死シテ其
功空シク成シカハ弥流浪ニ及タリ

御判
下　多田院御家人中
可令早領知攝津国
多田庄地頭職事
右為勲功之賞所宛行也者随忠之浅深各
可配分知行状如件
文安元年十月四日

應安元年
寄進　多田院
攝津国多田庄猪渕村之事

右當庄者御家人等為勲功之賞拝領地也
今為祈天下太平庄内安穏以件村元如一
円所奉寄附於院家也仍任衆議之趣評
諚衆加判之状如件

建武四年四月八日

沙弥西向
僧快賢
沙弥淨蓮
沙弥康心
沙弥道秀
源有仲
橘道直
沙弥心通
小野為時
源頼仲

新田山ノ圖

教氏（世良田二郎）

持親（源太 新田政所沙弥）

景満（次郎 満氏 瀬川合戦討死）

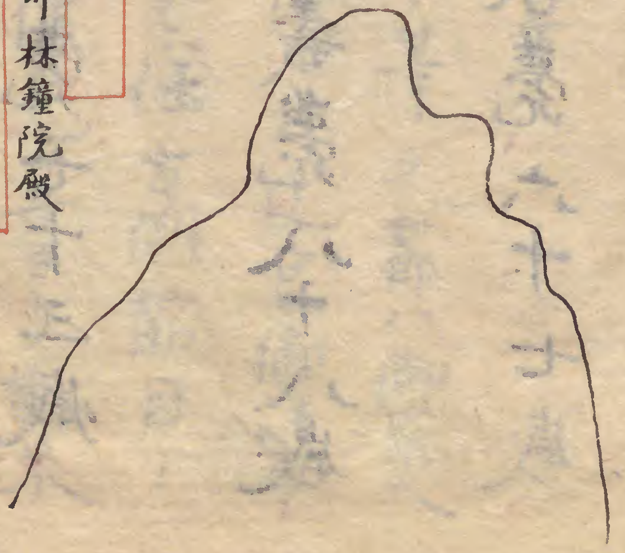
親季（寺倉右京）

家氏（新田五郎）

満義

有親（四郎 林鐘院殿 小童寺納）

下二山ノ形アリ



○治安元年七月廿四日頼光薨六十八歳神祭尊廟多田院ニアリ

○康平三年九月朔日頼信薨七十三歳神祭

○永保二年十二月十三日頼義薨八十八歳神祭

○長治二年八月十八日義家薨六十七歳神祭

寛文四年辰多田院御建立此時五代将軍一宇御勧請アリ源家長世ノ守護神ト奉拝

○多田満正ハ満仲公ノ嫡男也天延元年八月廿四日卒廿四歳ナリ

多田庄内波豆村奥厳八幡ト号ス

右ヨリ多田院堂供養御法事等之節ハ御家人守護仕候當時御社堂御修覆ニ付遷宮御法事等モ只今流浪ノ御家人トイヘトモ任古例節目ノ者共罷出吉例ノ験計守護仕候先年ヨリ勤來處旧記繪圖等多田院ニ有之

元禄十年丑二月

先年御家人勤來候守護

正月朔ヨリ七日迄天下太平ノ御祈禱
同十五日神前弓始
同廿八日滿仲公本地不動供
二月十五日涅槃會九頭虵祭（住吉明神行）
三月十五日源姓御祭八幡行
五月朔日馬乘神事
七月廿四日頼光御社（社祭）
八月朔日神前相撲
同十八日義家御社（社祭）
同廿七日滿仲御忌法花八講
同廿八日神前能
九月朔日頼信御社（社祭）
同上卯日五穀成就ノ祈禱
十一月三日頼義御社（社祭）
十二月十五日十六日十七日佛名會
右外將軍家御代〻御忌日（参勤）

毎年八月廿七日御神事供奉次第

御旗（獅子牡丹）長柄（十本）鐵炮（十挺）弓（十張）神馬一疋神輿出御還御ノ供奉御旅所御家人守護

右元禄九子年多田御社御修理ニテ満仲公七百御年忌ノ御法會（并御贈官被為成御廷宣御法會）ノ砌右之驗計奉守護候且又初テ神輿被為渡御神事被仰付御繁栄難有御家人輩右ノ通ニ出之御旅所ヲ守護シ今年元禄十年丑二月迄御神事無懈怠務候此外ニ唯今相勤申儀ハ

長日護摩供天下泰平五穀成就之御祈禱

永代法花千部毎年三月八日ヨリ十八日迄修行

右此両品ハ御家人等能勢多田勤化仕テ相勤申候

願人惣代
多田兵部
谷内藏右衛門

多田院御家人舊記

新田政所
原郷政所
今吉左衛門入道
久々知兵衛尉
塩川左衛門尉

田井柄馬亮
山門右馬入道
安福右馬入道
森本兵衛尉
織近源太入道
今吉宮太
高岡源四郎
田中紀四郎
西留左衛門
山本左近太郎
佐藤三

猪谷左藤太
石道進士
方至紀五郎
田原紀四郎
野間四郎
今吉萬助
一樋新太郎
萬善源三郎
上津村左藤太
柴合村春名分
平井小野四郎
對津左藤九郎

池藤兵衛
散所御家人
吉川判官代
山田左衛門入道
石田太郎左衛門
大町太郎左衛門
木津常陸房
黒田新六郎
西山中將
佐勇利八郎
小柳右馬亮
原田左衛門

槻並 杦袮庄 六瀬 北田原
多田院御家人名寄
木器下山左衛門
西山杢之丞
上津村十郎平
山田弥兵衛
能勢村右衛門
寺倉清右衛門
吉川勘兵衛
森本弥兵衛
出口與一兵衛
一樋杢左衛門
山庄司武兵衛

山本勘兵衛
松山兵右衛門
黒田權兵衛
小笠原新之丞
西留小左衛門
八代平左衛門
前西利兵衛
本財源右衛門
西村伊右衛門
目賀多伊兵衛
黒川太庵
下堂三之助
原七左衛門
平居三郎右衛門
野村儀右衛門
長谷宇兵衛
中田傳右衛門
久々知善兵衛
福田与右衛門
田中八兵衛
安村源蔵
井上源右衛門
大塩祖元
中西五郎左衛門
国津利右衛門
細谷十郎兵衛
三矢旌兵衛
河辺波門
多田兵部
脇田四郎左衛門

谷　内蔵右衛門
安福　柳軒
石道　仲右衛門
以上四十三人

右輩ノ先祖満仲公ニ奉仕シ相刕鎌倉ヨリ攝州夛田ヘ御移ノ節随身仕後来満沖公御遺言ニテ夛田庄内七十二箇郷御開闢地被下置代ニ能勢夛田ニ居住仕テ御庿社奉守護処天正年中秀吉御代夛田院社領并御家人等ノ領地悉被召上其以来名跡モ断絶仕躰ニ罷成候

語曰満仲公相州鎌倉ヨリ攝州夛田ヘ移玉フト言事ハ御父六孫王経基ニハ東夷將門退治ノ列成モ関東ニ領地有故ナリ依之満仲モ東国ノ仕ヲ勤玉フ又頼義義家両代奥羽ノ合戦ニ東国ノ武士相随戦功セシモ將軍ノ威アリトイヘトモ實ハ経基満仲以来ノ御馴染ナリ関東武士頼朝ノ味方ヘ来テ忠勤シ御家人ト唱タルモ此所縁ナリ亦上州新田ノ郷モ多田新田開

闢ノ土地ノ名ヲ移シ政所ヲ攝州ヨリ下シ置玉フ
ヨリノ名也根元ハ足利領内ナリ満仲ノムヨリノ所
縁ノ地ヲ以義家迄モ傳來ニ付其男義国足利
ニ下向シ新田モ其内ノ領地ナレハ義国ヨリ嫡男
義重ヘ新田ヲ渡其家ヲ興セシムト云々

徳川世良田之事

新田義重ノ四男義季徳川四郎ト号ス新田
庄世良田ノ郷徳川ノ邑ニ居住ス是又義重
ヨリ配當ノ領地ナリ亦徳川二郎ト号スルハ三
男義兼ヲ父ノ家督ト定ヲ以是ニ指續テノ
二男ノ故ナリ是等當腹ノ故ナリ此分小新田
ト称ス義季ノ嫡子ヲ頼有ト云徳川太郎ト号
ス二男ヲ頼氏ト云徳川弥四郎ト号ス又世良田
ト名ノル後三河守ト改号ス此人又義季ノ家

ヲ相続ス其所以ハ新田本家義兼ヨリ四世新
田又太郎政氏京都大番ノ懈ヲ以被没収ニ付
其所領半分宛分ケテ徳川四郎義季ト岩松
遠江五郎時兼ト是ヘヲ預義季支配ス是義
重ノ直ニ子息ニテ一族ノ長タルヲ以ナリ故ニ新
田ノ総家ヲ持ツ本家政氏ノ子息恩免ノ刻
両家ヘ預ル処ノ本領ヲ其子息新田太郎基氏
方ヘ相返ス岩松ヘ預分ル不残返シ徳川ヘ預ル
所ハ十ヶノ物五ツハ残シ置タリ故ニ徳川家領

地他ヨリハ多シ斯シテ義季ヲ新田大入道殿ト
称シ徳川家ヲモ新田ト呼タリ故ニ義季ノ嫡
男徳川太郎頼有ヲ新田下野守ト号シテ新
田ト續テ名乗ル此人男子無ニ付息女ヲハ岩松
五郎経兼ヘ遣置ヲ以其子ノ岩松太郎政経
ハ外孫タルヲ以猶子トシテ新田下野守ト名乗
シム依之頼有ハ新田下野前司ト号ス亦江田下
野前司氏唱然処ニ頼有實子下野太郎頼春出
生長ニ付新田徳川ノ家ヲ相継シメ政経ニハ

實方ノ岩松ヲ以西谷隠居入道シテ西谷頼宥ト号ス是岩松ニテ新田ノ本家ヲ相続スト云事實ナリ新田徳川両家ヲ相待処ナリ此政経入道頼宥ニ數男子アリ嫡子新田伊豫守義政ニ譲父頼有ノ配分地ヲ譲新田ト名乗シム故ニ世良田氏唱貞治三年七月謀反上州如来堂ニテ自害頼宥ノ庶子岩松兵部太輔直国後日ニ將軍方トナリ鎌倉ノ基氏ニ近江シ武州用土山ノ戦ニ忠ヲ盡ヲ以家ヲ立タリ其賞トシテ新田伊豫守義政ノ没収ノ地ヲ賜是ヨリ岩松家子孫相続ス

義季ニ男頼氏世良田ト号ス嫡男ヲ世良田二郎教氏ト云二男ヲ江田三郎有氏ト云後遠江守ニ改ム教氏ノ子ヲ家時ト云（或家持異説持親）世良田太郎ト号ス新田庄上江田（中下江田）田中村世良田郷徳川村等ヲ領スト世ニ申傳フ（不詳）其子満氏ト云ヘリ世良田二郎ト号ス（一説ニ江田三郎氏云併世良田江田一所也）其子満義世良田弥二郎ト号ス其子孫ノ内三州ニ来住シタリト

云云

並合記附録曰徳川藏人義季ニ三子アリ嫡

子世良田下野守頼氏一男徳川四郎頼有三

男世良田弥四郎頼成後三河守ト号ス此頼成

ニ二子アリ嫡子世良田遠江守有氏二男江田三郎

満氏ト云有氏ノ嫡子兵部太輔行義二男左

衛門尉家氏満氏ノ子ヲ二郎義氏ト云又

頼有ノ子太郎頼泰ト云其子ヲ四郎頼尚ト

言其子二郎尚氏ト云惣嫡頼氏ノ子教氏ト云

二郎ト呼其子三郎家時其子下野守満義

扨満義二子アリ嫡右京亮政義次ヲ大炊助

義秋ト云政義二子アリ嫡子修理亮親季二男

萬徳丸政親ト云親季ノ子ヲ左京亮有親ト

云次ハ女ナリ義御前ト云テ上州徳川萬徳寺

ノ本願ナリ有親ノ嫡子徳川三郎親氏ト云

後松平太郎左衛門ト改号ス二男泰親後

松平三河守ト改号ス末女ハ尼ニシテ妙阿弥ト

号スト云々其満義ニハ新田義貞ト相共ニ後

醍醐天皇ノ軍ヲ勤テ勲功ヲ盡セシカ武蔵

野笛吹等ノ合戰ニ味方敗績ノ後ハ世良田
ノ郷ニ潜居シ病死ナリ子息政義義秋兄弟
ニハ後醍醐ノ王子方トシテ忠ヲ盡ストイヘトモ
脇屋右衛門佐義治ノ子新田相摸守義隆相
州箱根ノ山中城ニ隠時節ヲ窺時城主木賀
彦六入道秀澄異心ニテ應永十年四月鎌倉
持氏ヨリ安東隼人佐ヲ以人數ヲ被差向
安東兵ヲ隠シ置木賀ト謀ヲ廻シ義隆ヲ
底倉ノ温湯ニ欺入レテ是ヲ害シ其ヨリ
東国上州寺尾ニ忍居玉フ宗良親王ノ御子
尹良親王ヲ討取レト衆ヲ揃ル由相聞ヘケレハ
宮ハ寺尾ヲ出テ信州諏訪ヘ移玉此時政義ノ
息親季政親兄弟ニモ此動亂ニ遭ヒ世良
田ノ旧居ヲ立退索居セリ　万德丸政親ニハ
尹良御供シ並合ノ危難ヲ遁シ尹良ノ御子
ニ付従尾張ニ到夫ヨリ三州ニ潜居シ松平太郎
左衛門ト改号シ後年ニ及テ出家政阿弥陀
佛ト号ス上州万德寺ニ在テ文正元年十月ニ

寂スト本文ニ載タリ、（政親ノ事、新田庄岩松家ニテ、終ニ其名不知、其所ニテモ覚ヘテ不云傳トナリ）
新田徳川世傳記（後風土記等ニ）曰、新田義貞戰死之後、
徳川政義親季父子二代流浪シテ、本国徳
川ニ蟄居ス、親季ノ子有親、其子親氏共ニ新
田ノ氏族ナレハ、義貞滅亡以来、京都将軍家
ヨリ根ヲ断葉ヲ枯スヘキノ下知ナレハ、身ヲ潜
メ所々ニ流浪セシカ、鎌倉管領持氏ノ親父
足利左兵衛佐満兼ノ時、縁ヲ求降参シ本
領ナレハ、上州世良田徳川ヲ安堵シテ、持氏ノ
代迄鎌倉ノ御家人ナリ、左馬頭持氏ニハ、永享
年中、京将軍義教ト不和出来テ、討手被
差下ニ附、持氏ハ武州高安寺ニ陳取防戦セ
シカ不叶、相州海老名陣ヲ替テ、猶軍兵ヲ被
催ニ付、有親父子合テ十二騎、雑兵合八十余人、
持氏ノ陣ニ加リ、力戦セシカ、敗軍ニ及ヲ以、寄手鎌
倉ヘ亂入ス、有親父子来テ、持氏ノ子息義久ヲ守
護スト云氏、不叶、一方ヲ討破、義久ヲ伴ヒ、其場ヲ切
抜シカ、十月一日ノ夜闇ニ襲来、敵ニ被取囲漸

辛キ命ヲ全シテ本国ヘ皈入ス斯リシカハ持氏父子生害ニテ関東ハ皆京将軍ノ下知ニ應シ管領上杉憲實ノ威勢大ニ盛ニシテ関東ノ製法アラメニシテ政務厳ナル事益々稠シ故ニ持氏ノ残黨猶以ス被捜中ニモ新田ノ一族ハ別シテ根葉ヲ可断枯トノ事ナレハ有親父子徳川ノ邑ニ安坐ナリ難ク永享十一年三月潜ニ相州藤沢ノ道場ニ入テ入道シテ時衆ノ僧トナリ父ハ長阿弥子ハ徳阿弥ト改号ス然リシ後ニモ東国ノ住居叶カタク信州ニ赴翌年六月父子伴テ三州ヘ来坂井郷ノ民家ニテ一両年ヲ送ルノ後松平郷ニ移シリト云々

徳川家上州新田在住ノ時四人家長アリ庄田木暮水戸石川ト云各上州退轉ノ時分散シテ庄田カ子孫世良田郷ノ内ニ土民ト成テ残ル其他ハ断絶シタリ徳川家三州ニ在住スト云ハ松平ノ徳川御家臣タル今ノ石川氏ニハ上州ヨリ三州上来テ奉仕スト云ハ古来ノ石川此家カ旧家ト云ハ

中年ノ相續ヨリ云事カ不祥岩松家ノ家長ヲ横瀬沼尻島金井ト云四人ナリ山岩松ノ新田治部少輔昌純ヲ其横瀬雅樂助成繁弑逆シテヨリ威勢ニ募カ岩松本城金山ヲ我物トス其子雅樂助国繁代ニ秀吉公關東征伐有テ常州牛久ヘ移サレ關東ハ家康公ノ御領ト成国繁新田退去ノ時ノ岩松ハ昌純ノ嫡孫新田治部太輔守純也シカ桐生ヘ引移リ其後故郷ナレハ新田ヘ立戻リ住居スト云𪜈浪々ナリ金山實城住居ノ時ヨリノ實城付ノ家人金谷荒後酒庭主水始終附随シ奉仕家康公ニハ岩松ノ新田ノ事御聞及ニ付守純カ子新田治部太輔豊純召ニ應シ参テ一見可仕由ノ御系圖ヲ不旨其方系圖ヲ又得ト御覧可有間残シ置ヘシト仰アレ𪜈不許諾ニ付御机嫌ヲ損シ重テ不被召然𪜈何トソシテ新田家ノ系傳御吟味有度思召ニ付テ幸ニ徳川ノ舊臣庄田カ子孫彼地ニ罷在ヲ以テ被為召早新田ヘ立皈新田ニテノ古来ノ由緒詮

議仕可申上由被仰付処ニ江戸御本丸ニテ御能近日有之由ヲ聞テ田舎者ノ珍事ト見物ノ為ニ逗留シ江戸ノ町人等ニ交テ御白洲ニ入テ見物ス是ヲ遥ニ御覧シ渠ハ庄田隼人成カ一昨日急ニ可立皈由被仰渡処ニ未罷立渠ヲ召セト呼セサセ玉フ処ニ面ヲ横エ振向ケ不知顔シテ居タリ故ニ渠モ御旨ニ不叶皆首尾ヲ仕損シタリ

横瀬雅楽助ハ素姓ハ京都四条通連歌師小野宗半カ子也尚純京都在番ノ砌召連出頭シテ尚純家ノ老臣横瀬主水ノ家ヲ續シメ横瀬専太郎ト言ヘリ

新筑考本ノ通ヲ系圖ニ顕ス所ナリ岩松満国入道法泉ニハ實子治部太輔早世ニ付テ新田義宗ノ子ヲ以家督トシ治部太輔満純ト名乗シム是天用ナリ此満純上杉禅秀ニ組シテ鎌倉ノ持氏ニ敵シ終ニ生害ス故ニ満国嗣子無ヲ以茅菜之二男能登守満春カ子ハ曽孫ノ訣有ヲ以名跡トス是満国ニハ満純ヲ猶子ト定ルト云圧一跡ハ未渡満純ハ自分ノ禄モ有テ名跡ヲ継迄ナレハ生害スト云圧満国ハ家ヲ立禄ヲ所持セル故満純生害ノ後曽孫持国ヲ以家督ヲ譲タリ満国ヨ

リ持国ヘノ譲状モ嫡子嫡孫ニ非サレハ後来相争
モ出来カト念ヲ入タル文言ニテ親父能登守ニ
テモ斯ノ譲与ル家督ニ搆スル事不可有トモ云
然レハ満純生害シテ廿余年ノ間ハ持国相續也
満純カ子家純ニハ父生害ヨリ廿余年ノ後京
都將軍義教ヨリ軍功ノ賞トシテ新田庄
ノ闕所ヲ賜フヲ以身ヲ起家ヲ立ヲ以又満
純ハ新田義宗ノ實子ノ後新田ト号スルヲ以
家純ハ新田ト名乗子孫相續シテ新田ト
号ス斯訣ニテ満国入道法泉満純家純ト系
傳シテ持国ヲハ系傳ニ省来ナリ
爰ニ正木新左衛門ト云者アリ渠曰祖父ハ新
田庄右衛門ト云父ハ正木庄右衛門ト云テ本多
上野介家ニ二百石ヲ得テ仕フ上野介家断
テ窂人ス新田支流ノ者ナリト披露ス其訣ハ
新田岩松家ニテ持傳タリシ文署書物ホ所持
ニ付号ヘヲ由緒トシテ大家ニ身上ヲカセクヲ以
尾張ノ御家ヲ望松平摂津守義行ヘ手入レ

シテ此文署書物不残一覧ニ入レシム摂津守殿ヨ
リ此ヲ写シテ岩松満次郎方ヘ賜フ是等ヲ以
岩松満次郎方ニテ家傳ノ穿鑿益仕居タリ
其家記享保十六年辛亥ノ秋大久保忠喬上覧
ニ入ヲ以テ彼正木カ方ノ文書等御僉儀ノ処ニ
正木新左衛門ハ先年病死ス男子ナク女子一人ノ
ミニテ吉田梅庵室ナレハ其文署類新左衛門死
後不残梅庵妻ノ方ニアリ然ニ其妻先年病死
シ後妻ノ子梅庵カ家ヲ相續シ今ノ梅庵ナリ當

梅庵カ母先妻ノ持傳シ右ノ文署等受取置此
度ノ御尋ニテ右ノ後妻方ヨリ是ヲ不残差
上ル最無紛物ナレハ是ヲ被召上梅庵方ヘ白銀五
枚賜右書物等公物ト成細ニ御披見ノ上ニテ岩
松満次郎カ系傳持国可有ニ非ス満国満純持国
家純ト傳来セシ事最ナリトノ上意ニテ彼文
署ノ内攝津守殿ヨリ写賜處ニ洩シ一通御写シ
被下持国ヲ系リ可申訣モ出タリ其御写賜ハ
持国ヘ送書ニシテ亡父大光ト云語アリ是ヲ以見

レハ、大光ト云ハ持国カ父ノ事ナリ、猶曽祖満国ハ、法泉ト云名アレハ、持国カ實父、能登守満春カ法名ヲ大光ト云カ、何レニモ大光料ト言ハ、持国ノ父タリ、

新田家之世傳徳川家之来由松平軍記

鎮守府将軍前陸奥守源義家三男、式部大輔義国ニハ、母ハ有国ノ娘ナリ、近衛院御宇久安六年、下野国足利ノ別業ニ下向ス、是新田足利両家ノ祖ナリ、其嫡男義重傳来新田家ナリ、二男義康傳来足利也、新田大炊助義重ハ下野国寺尾ノ城ニ居住ス、治承三年己亥、高倉宮御謀反ノ時、兵庫頭源頼政入道ニ仰セ、新宮十郎義盛ヲ使トシテ、令旨ヲ被遣、諸国源氏ヲ

被催ニ付義重等ハ源氏ノ中ニモ一二ノ者ナレハ殊ニ
憑被下ニ付テ義重領掌シテ内〻軍兵ヲ催ケル
處ニ宮ノ御謀反顕レ京ヲ御立退宇治川ヲ隔テ
合戦有ト云圧不叶頼政父子討死シ宮モ流矢ニ中リ
失セ玉ヘハ国〻ノ源氏ノ輩力ヲ失フ翌四年八月
頼朝謀反ヲ起東国ノ軍兵ヲ潜ニ被催ケル時
義重ヲ味方ニ被招シカ圧義重ハ自立ノ心掛ニ附キ
所存有ト答ニノ是ニ不應返書ニモ不能ス自ラ
ノ城ニ引篭軍兵ヲ聚ム頼朝ニハ東国ノ輩余
多ク味方ニ参武威募ヲ以平家ニ黨シテ味方ヘ不参
ノ輩ヲハ是ヲ討亡シ鎌倉ノ御舘ヲ調移玉フ後同
十二月廿二日義重入道上西方ヘ足達藤九郎
盛長ヲ被遣被召寄ニ付義重参上ノ處ニ無左
右鎌倉ニ不可入トノ仰アレハ山内辺ニ逗留ス是
然ル頃義重ハ軍兵ヲ招寺尾城ニ引篭由風聞
有ト讒責ノ故ナリ義重答テ心中更ニ異儀ナ
シトイヘ圧国中闘戦有御輙城ヲ出難ノ由家
人等諌申ニ付猶豫仕ル処ニ係ル仰ヲ蒙事大

二恐候ト諫防ス此事盛長様々執シ申ヲ以聞召被開免許ナリ又義重ノ嫡子里見太郎義俊ノ子太郎義成ハ日本平家ニ相属シケレ𪜈源家ノ繁栄ヲ傳聞京都ヨリ参上ス是平家ヨリ源氏ノ一族ヲ可追討由ニ付某關東エ下向仕一類申合頼朝ヲ可襲討ノ旨偽申処ニ宗盛悦テ免許ニ付馳参候ト申ケレハ其志祖父義重ト𪜈異可涯近旨仰ラル同六年七月十四日義重入道ハ頼朝ノ勘気ヲ蒙ル此儀ハ義重ノ息女アリ頼朝舎兄悪源太義平ノ後室ナリ此程頼朝ヨリ伏見冠者廣綱ヲ使トシテ潜ニ艶書ヲ通セラルヽト云𪜈更ニ許容ナシ依之直ニ又義重入道ニ被仰処ニ義重思案ニ及フト云𪜈御臺所ノ嫉ヲ憚リ俄ニ彼息女ヲ帥ノ六郎ニ嫁セシム故ニ頼朝是ヲ憤リ勘気セラル扨義重入道ハ建保二年甲戌正月十四日逝ス大光院義重上西禪定門ト号ス義重入道ニ七人ノ男子アリ嫡子ハ新田蔵人義兼二男ハ山名三郎義範山名家ノ

祖ナリ三男ハ新田太郎義俊里見（上野国里見住）祖ナリ
四男徳川四郎義季是徳川世良田ノ祖也五
男ハ額戸五郎経義六男ハ新田冠者義光七
男ハ新田小四郎義佐末女ハ悪源太義平ノ妻ニテ
帥ノ六郎ニ再嫁ス徳川義季ノ嫡子ヲ徳川太
郎頼有ト云フ二男ヲ世良田弥四郎頼氏ト云フ
後新田三河ノ前司ト号ス頼氏ノ嫡子ヲ世良
田小二郎有氏二男ヲ世良田次郎教氏三男江
田三郎満氏ト云（新田義貞ニ奉仕シテ度々軍功アリ太平記ニ光義トアリ非也）世良田教
氏ノ子ヲ世良田又次郎家持ト云（家時ト或書ス非也）上野国新
田庄并上江田中下庄ニ三ヶ所田中村世良田郷
徳川村等悉皆家持所領ナリ家持ノ子ヲ弥
二郎満義ト云（世良田ナリ太平記ニ江田三郎光義ト有ハ非ナリ）
満義カ子世良田太郎政義ト云元弘三年五月
新田義貞ニ随テ鎌倉ニ押寄セ江田里見鳥
山田中羽川山名桃井以下ト共ニ稲村ヶ崎ノ干潟
ヨリ敵ノ後ヘ廻ッテ安東左衛門聖秀入道条
此所ヲ防軍敗北シテ自害ス各軍功アリ後年

義貞ハ越前国足羽ニテ討死之後政義其子徳川修理亮親季父子ニ代流浪シテ本国徳川ニ蟄居ス親季ノ子徳川左京亮有親々々ノ子徳川三郎親氏氏ニ祖父政義ヨリ新田ノ氏族ナレハ義貞滅亡以来京都足利将軍家ヨリ根ヲ断葉ヲ枯スヘキ下知ナレハ身ヲ潜メ所々ニ流浪成シカ鎌倉ノ管領持氏ノ親父左兵衛佐満兼ノ時ニ縁ヲ求降参シテ本領成ヲ以上野国世良田徳川ヲ安堵シテ持氏ノ代迄鎌倉御家人ナリシ足利左馬頭持氏ニハ永享年中京都将軍義教公ト不和ノ事出来シテ討手ヲ差下サルニ付テ持氏ハ武州高安寺ニ陣取テ防戦セシカ不叶相州海老名ニ陣ヲ督テ猶軍兵ヲ催促ニ付有親父子其弱ヲ捨シ事武士ノ本意ニ非ト父子合テ十二騎雑兵八十余人持氏陣ニ加タリ扨上方勢豆州ヲ経テ相州四郡エ攻入由持氏ノ陣所ニ聞ヘシカハ上杉陸奥守憲直ヲ大将トシテ二階堂一黨徳川父子海老名上

野介宍戸備前守千百五十騎差向此輩九月廿
七日相州早川尻ニ着シテ軍評定ノ時徳川有親
進出曰小勢ヲ以大敵ニ當リ難シト云𪜈不戰シ
テ可勝道ナシ混スラ討死ト定ラルヘシ但小勢ヲ
餘多ニ分ケハ所々ニ押隔ラレテ墓々布軍モセ
ズ犬死セント存シハ唯一手ニ組合セ敵陣ヲ蒐破
ニ三一敵敗走セハ進討スヘシ敵強シテ不破ハ速ニ
討死セント申ケレハ皆此儀ニ同シテ抜戰ニ成シ
カハ各乘馬ハ肝強シ蒐破馳戾右往左往ニ當
テ力戰ス故ニ此輩皆數ケ所手ヲ負タリ有親父子
飽迄力戰シテ其塲ヨリ鎌倉ニ落行持氏ノ子息
義久以下ヲ守護シタリ方々ノ防戰禦拒相戰ケレ
ハ寄手鎌倉ヘ亂入ス今テハ御所可防武士等散々ニナ
シハ徳川父子早川尻ヨリ来テ義久ヲ守護セシカ今
ハ不叶処ナリト父子并家子十八人一方ヲ討破義久ヲ
伴ヒ扇ケ谷ヘ落行タリ寄手早放火シテ御所
灰燼ト成ヲ以燒死ノ骸ヲ點撿セシカ𪜈義久ノ屍
不相見ハ生捕𪜈ヲ推問ニ及シカハ徳川父子其外

付副扇カ谷ノ方ヘ落玉フト申ヲ以追カケ可討取
ト七十余騎操々ニテ馳向義久歩行ニテ墓不行ヤ
カテ扇井ノ辺ニテ追付タリ此所ニテ徳川父子ヲ
始付随フ輩其従兵迄踏止リ防戦義久ヲ落サ
ント働シカトモ十月一日ノ夜ナレハ闇フノ歎味方見
ヘ分タス終ニ九騎ニ被討成父子ニモ足助兵庫ニモ
薄手多負ハナカラ辛キ命ヲ全シテ各思〻ニ落
散義久ハ生捕トナル徳川父子ハ本国上州徳川ニ
皈リ暫蟄居シテ世ノ有形ヲ窺居タル処ニ

持氏父子既ニ生害アリ然後ハ関東ハ皆京都将
軍ノ下知ニ応シ管領上杉安房守憲実威
勢益〻盛ニ大名渠ニ多諂フ斯シヨリ関東制
法新ニシテ政務ノ事厳重ナリ大名ハ普ノ将
軍ニ皈伏シ相残ル輩ハ或ハ討レ或ハ自滅シタリ
ト云圧其残党猶東国ニ多ク有シ中ニモ新田ノ
一族ニ於ハ捜求根ヲ断葉ヲ可枯ト下知有シ
カハ有親父子徳川ニ安堵成難ク永享十二年三
月上旬父子ニハ潜ニ徳川ヲ遁出彼方此方流浪

シテ半年計ノ後猶行先ノ追ヲ以相州藤沢道場清浄光寺ニ入テ剃髪シテ時衆ノ僧トナリ有親ハ長阿弥息親氏ハ德阿弥ト改号ス然後東国ノ住居叶ヒ難ク信州ニ赴ク爰ニ小笠原清宗ノ三男林藤助光政ニハ持氏在世ノ時數年近習ノ勤仕ノ者ナリシカ讒者ノ口ニ罹リ被没収浪々シテ名字ヲ林ニ改信州ノ山家ニ蟄居ス有親在鎌倉ノ時睦馴ケレハ極月末凛ヲ尋到藤助大ニ悦是ヲ饗セントス欲レトモ一物ナシ自ラ雪掻分ケテ狩シテ兎一匹ヲ得タリ翌朝ハ永享十二年庚申元旦之有親父子エ雑炊ヲ呈シテ且兎ノ吸物ヲ進ム是ヨリシテ兎ノ吸物ヲ德川家ノ嘉例トス其年中程過藤助カ許ニ月日ヲ被送同年六月父子信州ヲ立テ三州ニ赴キ坂井ノ郷民家ヲ借テ一両年ヲ送ル然ルニ嘉吉二年壬戌十月有親卒ス四十五歳ナリ息親氏廿四歳ニテ其地ニ住ス其ハ所ノ庄官五郎左衛門富田リト云尼

按酒井家相続ノ時已束髪ハセラルヘシ又松平ヘ入婿セル節還俗スト有此間甚詳カナラス

女子唯一人ヲ持ツ親氏ヲ聟ニセント許ス故ニ其家ニ移リ其年ノ暮ニ家ヲ継翌三年ノ十二月一子生ル是ヲ酒井五郎ト号ス（一説徳太郎ト書）妻女ハ産後ニ卒ス親氏是ヨリ鰥タリ然ニ同国松平郷ニ太郎左衛門ト云富家ノ庄官アリ近里ニ名高シ渠モ女子壹人ノミ也聟ヲ入ヘキ沙汰モナク娘既ニ廿五歳ニ及或時親氏ヲ饗シテ還俗有テ聟ト成家督セラルヘシト望親氏諾シテ此時還俗シテ其家ニ移ル故ニ太郎左衛門隠居シ家督ヲ譲ヲ以テ是ヨリ松平太郎左衛門親氏ト名乗坂井ノ郷ノ家督ヲハ先腹ノ子五郎ニ譲リ是ヨリ酒井ノ字ヲ改称セシメ當家ノ家長タラシム太郎左衛門カ娘ノ腹ノ子ヲ以松平ノ家督トシ惣領ニ定ラル其相続ノ男子泰親也泰親智勇ニシテ然モ仁慈ノ気質ナレハ松平ノ親族ニ親ミ近村ノ者迄ヲハ狼藉シテ縁ヲ結ハセ因剽ヲ以一族縁座数ニ及フ去永享十一年ヨリ嘉吉文安宝徳享徳康正長禄寛正文正

迄都テ廿八年ノ間ハ諸国一等ニ擾亂シテ強キハ弱ヲセメケ大名ハ小名ヲ掠メ代官ハ地頭ヲ害シ庄官郷民一揆シテ守護人ヲ追補シ其所領ヲ奪取ル是等ノ事ヲ親氏見及一族縁座ノ外ニモ親キ輩ヲ招キ當時ノ摸様ヲ語リ手ヲ廣メ各ニモ所領ヲ附與セント云云一座一同ニ可然ト領掌ニ付其人數ヲ催シ近郷ヘ追掛従フ者ヲハ味方トナシ不従者ヲハ誅伐ス斯シテ勢大ニ成三州ノ内岩津竹谷形原大給御油深濵野見岡崎辺迄大略切従タリ嫡子二郎三郎泰親若年ト云トモ驍勇ニシテ先登シ毎度武功ヲ顕シ斬取シカハ皆親氏ノ下知ニ應ス

爰ニ三州菅沼ノ領主土岐新三郎定直ニハ親氏ニ不雌伏渠當国住居ノ事去正長元年ニ南方ノ小倉殿謀反ヲ企テ潜ニ嵯峨ヲ逃出勢州ニ赴テ彼国ノ国司北畠家ヲ頼テ合戦セリ其頃三州ノ住人菅沼信濃守俊治ニハ將軍義量卿ヲ恨ル事有ニヨツテ小倉殿ニ與力

シテ素懐ヲ遂セントセシ処ニ小倉殿ニ御和睦
ニテ再嵯峨エ還ラセ玉ヘハ菅沼モ亦三州ヘ皈シ
カトモ斯テ何迄有ントト国民等ヲ衒ヒ一揆ヲ
企テ近境ヲ犯シ奪フ三州ノ早馬京都ニ馳セ
事ヲ告シカハ是ヲ可誅伐ト土岐大膳大夫興
安并富永伯耆守久氏土岐孫太郎頼房舎
弟ノ新二郎光貞土岐新三郎定直等興安ニ
随ヒ永享六年甲寅ハ二月廿四日三州菅沼ニ赴
相戦フ土岐定直搦手ニ向テ自ラ軍卒ヲ励シ
頓テ信濃守ヲ討取リ其首ヲ得タリ信濃
守カ弟ノ菅沼新太郎後栄ハ将軍ノ近仕シテ
上方ニ居テ兄ノ逆意ニ不與弥忠儀ヲ尽ヲ以
厚免ヲ蒙リ猶近仕ス土岐定直ハ今度ノ軍
忠他ニ抽タリト菅沼ノ所領ヲ賜リ土岐ノ名字
ヲ改菅沼新三郎ト名乗タリ然ニ今度親
氏ノ下知ニ應セサレハ長禄二年戊寅ハ四月十八日
嫡子泰親ヲ大将トシテ菅沼ニ押寄攻戦フ
定直防戦スレ氐一晝夜稠攻ラレ力ヲ盡降ヲ乞

旌下トナル是ヨリ其子左近定吉其子新八郎定
鎮其子新八郎貞俊其子織部正定如其子織部正
定盈近代ニ徳川家ノ家人ナリ又信州ノ林藤助
ハ親氏三州ニ秀玉フト聞傳康正二年丙子五月十日
三州ヘ尋来奉仕シ子孫家人ナリ親氏ニハ三州大
略切随ヘテ應仁元年丁亥四月廿日逝ス芳樹院
俊山徳翁禅定門ト号シ高月院ニ葬ル親氏
死去ニ付子息泰親家督シテ頓テ松平太郎左
衛門ト号シ武威ヲ国中ニ振フ其頃閑院大納言

實凞参州ニ謫居シ玉フ労申悦ヲ以皈洛ノ後
是之ヲ執奏シ参州目代トナシ從五位下参河守ニ口宣
成被下是ヨリ国中弥下知ニ随フ頓テ當国
岩津ニ新城ヲ築二男和泉守信光ヲ入置岡
崎ニモ城ヲ構テ泰親是ニ移住ス此時庶兄酒井
五郎親清ノ嫡子同小五郎氏忠（後左衛門入道淨賢）二男酒
井與四郎親重父子三人先陣ヲ勤ム此泰親ニハ
子アリ嫡松平太郎左衛門信廣是ニ松平郷ヲハ
譲リ二男徳川和泉守信光是ヲ家督トス三六

遠江守益親、四ハ出雲守家久、五ハ筑前守家弘、六ハ備中守久親也、泰親ハ、文明四年壬辰九月廿三日ニ卒、（或永亨二年戊午）良祥院秀岸祐金大禅定門ト号ス、此時代ニ豊後ノ住人、本多八郎助秀ノ七代本多八郎正時、同助時兄弟三州ニ居住セシカ、泰親ノ武勇ヲ感シ其手ニ属シ、軍功ヲ顕シ御家人トナル、正時ハ佐渡守正信五代ノ祖、作左衛門重次ニハ四代ノ祖、縫殿頭康俊ニハ七代ノ祖ナリ、助時カ子平八郎助豊ハ中務太輔忠勝カ曽祖父ナリ、泰親死去ニ付二男和泉守信光家督シテ、岩津ノ城ニ居シ、岡崎城ヲ保タリ、信光武勇秀タル故ナリ、依テ国侍ノ心ヲ一ツニセシメ、敵ノ氣ナ奪ン為ト、謀ヲ搆、織田方ノ持城安祥ヲ乗取ラント、其西野ニテ躍ヲ調、城兵ヲ賺シ出シ、大隙手ニ入、是文明十一年己亥七月十五日ノ夜ナリ、安祥落シカハ、西三河三分一ハ手ニ入タリ、長享二年戊申七月廿二日卒ス、崇岳院月堂信光禅定門ト号ス、遺言

ニ付岩津村ニテ葬、浄土寺ヲ建立シ信光明寺ト唱フ、信光二男女四十八子有、嫡子ハ竹谷ノ松平左京亮守家、是ハ岡崎ノ城守タリ、後号和泉守ト、（今ハ松平玄蕃カ元祖也）二徳川二郎三郎親忠、岩津ノ城主ト云テ家督タリ、後修理亮又改右京亮、三男松平三郎昌龍、四形原松平佐渡守興嗣、（今松平紀伊守元祖ナリ）五岡崎松平大膳亮光重、後改紀伊守、（當時水戸家中松平壹岐守、志摩守元祖、）六ハ松平八郎右衛門光英、七ハ御油深溝ノ元祖松平弥三郎元芳、八ハ野見ノ松平次郎右衛門光親、（當時松平丹後守同大隅守等先祖）九美作守家勝、十松平修理亮親正等也、庶子ノ分大概国中ノ武士ヘ送リ、聟トシ娶リ、猶子トシテ一族縁坐余多ニ及ヘリ、

右京亮親忠家督シテ父ニ続テ村里ヲ伐取事多シ、其頃三州ニ小山下野権守政康ト云者野州ヨリ来住シテ、小河ノ城ニ居ス、此所織田家ノ持分ナリ、渠カ先祖源家ノ石川武蔵権守義基ノ後胤ニテ、所縁ヲ以、小山ト称シ

来リシカ本姓ニ復其三子等相共ニ康親ニ奉
仕シ御家人トナル親忠ニ一族郎等国人ヲ率シ
延徳元年己酉二月廿日井田郷ニ出張ス是當
正月七日京都將軍義政公薨去ニ付天下物
忩ノ節ナリ尾州ノ織田信秀ト此所ニテ終
日戰テ終ニ討勝ヲ以敵敗北シ多討レタリ明
應六年丁巳十月廿日隱居シ剃髮シテ西忠ト
号ス子息九人嫡子ハ岩津太郎親長岩津ヲ
領ス二ハ松平源二郎乗元大給家之祖也三ハ德
川二郎三郎長親此人ヲ家督トス四ハ松平弥八
郎親房後改玄蕃允五超譽上人智恩院ノ
住持ナリ六ハ松平刑部丞親光七安祥左馬助長
家ハ松平助十郎張忠後改右京亮岩津ノ内
衆トナル九ハ松平加賀右衛門乗清瀧脇ヲ領ス此
時榊原七郎右衛門長清始テ家臣ト成渠ハ仁
本義長流ニテ勢州一志郡ニ住シ始ハ孫十郎
ト云三州来住ノ者ナリ
長親ハ父親忠隱居入道セシニ付家督ヲ繼安

祥城ニ住ス始ハ二郎三郎忠次ト名乗シカ藏人亟長親ニ改又出雲守ニ任ス父祖ニ續テ武威逞其上寛仁ノ生質ハナレハ国民ヲ能撫育セシカハ西三河ノ人十六人ノ外ニ高山三郎左衛門忠正遠山左衛門尉景前等ノ類旌下ト成故ニ其他遠境ニ及シ輩モ不招ニ来服依之駿遠ノ守護今川氏親三州モ大概幕下ノ処各德川家ニ降参セシ事ヲ驚キ北条新九郎長氏ヲ大將トシテ一萬ノ兵ハヲ添差向ル故ニ長氏文亀元年辛酉九月西三河ヱ馳向吉田ニテ勢揃シテ岡崎ノ城ヲ（岩津ノ城可成）襲攻ム當城ニハ長親ノ舎兄岩津太郎親長篭居テ防戰此事安祥ヘ聞ヘケレハ長親入道道閲是ヲ可見弃ニアラスト子息ニ一族家臣ヲ催シ彼是千三十余兵ハヲ以テ横ヲ入攻討シカハ長氏カ下知モ不用崩立テ敗北ス故ニ衆勢是ニ被引立曽山迄敗走スレハ追討シテ首ヲ取事余多ナリ石川本多ノ榊原大久保林等ノ家臣粉骨高名ス此大久保和泉守忠政ノ父大久保和泉

守忠繁カ本国ハ野州ニテ代〻那須与一カ長臣ニシテ彼家随一ノ者ナリシカ忠政代ニ及テ那須ヲ恨テ細有テ数代ノ所領大久保ヲ弃テ三州ヱ来居セシカ器量有ヲ以郷村ヲ伐取テ武威ヲ振シカ長親ニ属シ長ク家臣ト成忠政カ子ヲ五郎右衛門忠勝ト云子孫数多ク分流ス此岩津合戦ノ手際ヲ見テ田原ノ城主戸田弾正左衛門宗光ニハ数代ノ今川ノ旗下ヲ離シ長親ニ属シタリ扨長親ニハ親父西忠存生ノ内ニ自分モ入道シ道閲ト号シ家督ヲハ嫡子二郎三郎信忠ニ譲リ二男三郎二郎親盛ニハ福釜三男與市信定ニハ櫻井郷四男甚太郎義春ニ青柳郷五男彦四郎利長藤井郷ヲ譲與フ文亀二年壬戌九月ニハ政道共ニ信忠ニ任セタリ扨明應九年八月十日ニハ親忠入道西忠卒去在世ニ建立ノ大樹寺ニ可葬由遺言ニ付此處ヘ送リ松安院大胤西忠大居士ト諡シタリ親忠入道卒去ニ付長親入道ヨリ大樹寺ヘ法度ノ條〻被出ニ付當国ニテ

旗下タル縁坐ノ輩、各令連判、

禁制

一於當寺中狼藉之事

一竹木伐取之事

一對衆僧致非義之事

右於背此旨輩者可處罪科候、當寺之事、
西忠為位牌所上者、自然国如何様之儀出来
候共、為彼人屢可被致警固者也、仍如件

文亀元年（辛酉）

八月十六日　　德川二郎三郎

長親（在判）

国衆十六人（各在判）

形原左近將監貞光

丸根美作守家勝

田原孫次郎家光

上野左衛門太夫親堅

岩津源吾光則

岩津大膳入道常蓮

岩津弥九郎長勝

岩津弥四郎信守

岩津八郎五郎親勝

岡崎左馬允親貞

長澤七郎親清
牧内右京進忠喬
竹谷弥七郎秀信
岡崎六郎公親
細川次郎親世
岩津源三算則

信忠、徳川二郎三郎ト号ス、左近蔵人ニ改ム、又長親入道道閲ヨリ、文亀二年ニ、實ニ家督ヲ受取大永二年壬午迄、家務ヲ取事廿一年也、其志無道ナレハ、累代家人ヲ疎ミ、一族縁坐モ離別ノ人多、父祖ヨリ附随セシ、尾州駿州ノ與力ノ国人皆、本主ノ方ヘ皈降シケレハ、安祥ノ領人、安祥左馬助長家モ、今川家ニ心ヲ通シ、其城ヲ不返、漸今ハ岡崎一城ヲ守レリ、依之家臣等ノ心區々ニシテ、信忠ヲ捨テ、信定ヲ主君ニセント云輩アリ、酒井本多大久保石川等曰、信忠無道也トテ、庶子ニ取替ン事有ニヤ、幸幼息十三歳ナレハ、此人ヲ家督ニ立テ、信忠ヲ隠居セシメント密談シテ、大永二年、押テ信忠ヲ大濱ヘ移シ、隠居セシメ、幼息ヲ家督ニ立ル、号ス清康ナリ、

信忠大ニ憤トイヘトモ如何共仕難ク是非ナシ此時
迄山中ノ両城ヲハ松平弾正左衛門昌安心替リ
シテ奪取テ信忠ニ敵對シタリ今度清康家
督ニ付舎第松平藏人信孝ニハ三ツ木械卿同第
十郎三郎康孝ニハ見須ノ卿ヲ割授タリ信忠隠
居ノ後享禄四年辛卯七月廿七日卒去ナリ大樹
寺ニ葬安栖院泰孝道忠居士ト号ス
清康十三歳ニテ家督ヲ継号世良田二郎三郎
家臣ノ計ヨリ世若年トイヘトモ寛仁英才雄略ナリ
故ニ皆人因カシワキケレハ信忠ノ時相叛輩皆皈降
シタリ既ニ十五歳ノ時大久保忠勝カ勸ニ付テ大
永四年五月廿八日ノ夜風雨烈シキヲ幸ニ偷人ヲ
以弾正左衛門昌安カ山中城ニ忍ハセ内外ヨリ是
ヲ攻立首七十三ヲ討取忽城ヲ乗取シカハ清康
此勢ニ乗テ岡崎ヲモ乗取ントス翌十六日押寄セ
急ニ攻付タリ昌安自討出命ヲ限ニ防シカトモ
山中ノ落人共モ落来リ居リシカ是之等カ億病
ニ引シテ城兵ハ墓〻し布不働ハ昌安ハ不叶降

ヲ乞其娘ヲ清康ノ妻ニ進セ岡崎ノ城ヲ渡タリ斷嚮ニ仍テ西三河大半清康ノ手ニ屬シタリ

又前文段ニ長親ノ代ニ岡崎ノ城ニハ岡崎彈正左衛門昌安居住是モ一族タリシカ長親ヲ聟ニ取テ男子ナケレハ城ヲ長親ニ讓ル是ヨリ安祥岡崎ノ両城主ト成テ武威益盛ヘト云々此本文ニ今亦如此又信忠無道ニ付從臣屬士相叛安祥ヲ預人ノ安祥左馬助モ安祥ノ城ヲ以今川家ヘ降リシカハ信忠ニハ漸岡崎一城ノミ持テリト云テ今岡崎山中両城清康ノ手ニ入ト云ハ信忠ヨリ清康家督ノ在城ハ何方ト文中始終ノ首尾不調昌安カ信忠ヘ敵タリトテ岡崎ノ城ヲ又取返シ相籠居タリトモ不相聞惣ノ三川記ト云御先祖ノ来由ヲ書記セシ書史皆先後ノ首尾不調著述ノ輩不穿鑿ナリ能〻吟味スヘシ

昌安ノ娘甚嫉妬ニテ仕女ヲ害ス翌年ノ正月離別ナリ是ヲ恨慕ヒ不再嫁尼ト成テ玄能ト法号ス同年（大永五乙酉ナリ）九月江州ノ住人青木筑後守貞景カ娘ヲ清康要リ翌六年（丙戌）四月廿九日仙千代丸出生是廣忠ナリ清康十七歳ノ時ナリ其青木カ女ハ産後ノ病ニ卒ス其後宮善七秀成カ娘ヲ迎ヘラル是ハ苅屋ノ城主水野右衛門太夫忠政カ妻ニテ忠政死テ孀タリ容儀ノ麗

ヲ以娶シリト此女水野カ方ニテ産タル女子一人ヲ伴ヒ来 後年廣忠ノ妻ト成ル故ニ行逢兄弟也傳通院殿ナリ

清康ノ一族幕下松平大炊助忠定ハ大炊助忠景カ子ニテ三州額田郷ノ岩津ニ居住シ小美村ノ城主トシテ同国ノ米津四郎右衛門ト云織田方與力ノ士ト数年挑戦シカ大永二年癸未私ノ軍士ヲ以渠ト戦テ雌伏セシメ其領地ヲ攻取又保母村ヲモ攻取知行トス此時迄深溝ノ城ニ大場主膳ト言敵有テ威ヲ近郷ニ振フ忠定是ヘモ私トシテ押寄終日戦フ故ニ主膳正防戦ノ術ヲ失テ城ヲ弃去是ヨリ忠定深溝ニ居住ス清康岡崎城ヲ攻玉フ時モ忠定嫡子好景共ニ相従テ軍功ス其好景カ子主殿助家忠ナリ 段ヽ相續ス

尾州岩崎野呂両城ハ織田家ノ持城ナリ享禄三年庚寅五月八日清康西三河ノ軍兵七千ヲ率シテ尾州ヘ出張シ偷人ヲ兼テ岩崎ノ城ニ入置火ヲ放セ内外ヨリ攻立ル城主荒川新八頼宗

防戰不叶討死シ城忽陥タリ夫ヨリ野呂ノ城ヘ押寄攻口一所計不攻堀ヲ渡構ヲ破リ平攻トス城主坂井彦右衛門突出戰ヒシカ軍兵多ク討セ城ニ立皈腹切テ死タリ依之當城ニハ櫻井ノ松平内膳正信定カ軍士ヲ入置玉フ清康廿一歳ノ時也夫ヨリウ理ノ城ヱ押向叔父松平右京亮親盛同内膳正信定ニ四千ノ兵ヲ添大手ヘ向シメ自ニ手ノ兵率シ搦手ニ被攻城主熊谷備中守直盛三百余兵ハヲ従ヘ城中ヨリ突出防戰ヘハ内膳敗走ス

右京亮下知シテ踏止リ戰テ討死ス然モ内膳可救トモ逃去清康進テ戰城門ヲ攻敗ル故ニ城主直盛不叶城ヲ棄テ逃去城ハ手ニ入タリ時ニ討取首三百七十余ニシテ味方ニモ九十余人討死其外手負ハ余多ナリ此直盛ニハ江州ノ熊谷ニテ直実ノ後胤ナリ清康右ノ外小城トモ余多攻抜ハ西三河ノ輩大略味方ニ属ス時享禄四年辛卯七月廿七日隠居信忠卒ス故ニ暫軍ヲ被止翌天文元年壬辰四月吉田ノ城ヲ攻ントテ同十六日出陣シ

赤阪ニ陣取タリ吉田城主牧野田三兄弟評シテ曰東三河ハ今川織田ノ両家ニ屬ス西参河ハ清康ト某両人ノ領城ナリ故ニ岡崎攻取ント志ニ今清康遠當城ヘ押寄事幸ナリ途中ニ馳向雌雄ヲ決セント兄弟千余兵ヲ率シ城ニハ老兵ニ足軽共ヲ添七十余人ノミヲ残シ城ヲ打出ル故敵味方入亂実戦スレハ牧野兄弟四人トモニ討死シ残兵等ハ吉田ノ城ヘ引入故ニ是ヨリ吉田ノ城ヱ押寄攻ラルヽニ皆防ニ不及逃去ハ城ハ手ニ入リ以

清康當城ニ入テ暫休息シ夫ヨリ田原ノ城ニ押向城主戸田弾正父子長親ノ代ニハ旗下成シカ信忠ノ代ニ相叛シカ堪エカ子再降参ス夫ヨリ吉田ノ城エ皈リ十余日逗留ノ内ニ牛窪牧野新次郎貞成設楽ノ設樂甚三郎貞光西郷ノ西郷新太郎ニ連木ノ戸田丹波守康長伊奈ノ本多平八康重駄ノ嶺野田ノ菅沼新八定盈其外山家三方作手長間西郷ノ輩長親ノ旗下成シカ信忠ノ代ニ叛今川織田ニ与力シテ徳川家ニ敵セシ輩

吉田ハ来恥ヲ謝シテ降ヲ乞属スレハ西三河ハ悉ク
ニ入タリ故ニ所々ノ仕置ヲ下知シテ守護ヲ置テ守
セ岡崎エ皈陣ナリ清康猛威近国ニ聞エケレハ甲
州ノ武田大膳太夫信虎年頃徳川家ト所領ヲ
争折〻軍ニ及ヲ以如何思ケン金丸伊賀守藤次
カ嫡子若狭守虎嗣ヲ使トシテ岡崎ニ送リ自
今新ニ交厚クシ互ニ大事ノ軍ニハ合力スヘシトナリ
清康是国嶮易風俗等迄見窺ニ為ノ謀ト察
シ態ト應楊ニ使者ヲ城中ニ呼入對面シ仰ノ通
ニ向後疎意有マシト返答シテ被返
又尾州森山ノ城主ヲ始織田家持ノ小城尾清康
ヘ密通シ濃州ノ国人等数十人ヲ衒ヒ清康ノ
味方トナシ尾州ヘ出張有ラハ合力セント申送ヲ以
清康一萬余ヲ率シ天文四年乙未十二月四日
尾州ヘ向テ岩崎ニ陣シ信秀ヲ偽引出サント処ニ
放火シテ翌五日ニハ森山ノ城ニ陣取シカハ信秀未
出向処ニ叔父櫻井内膳逆心ヲ企テ今度催促
ニ不應虚病ヲ構テ上野ノ城ニ相篭織田ヘ密通

シ清康ヲ亡シ其本領ヲ押領セント巧由相聞
ケレハ頓テ是ヲ攻亡ント清康怒玉フ酒井忠次
大久保父子曰渠織田ニ組スル由然ラハ御一族タ
ル大給ノ親乗長澤ノ康忠且小川ノ城主水
野下野守等ハ内膳ノ聟ナレハ加勢セシモ難計
所詮敵国ノ長陣ハ失多候ヘハ軍ヲ班スニ不如
ト色々諷諌申ニ依テ明日引入ヘキニ定タリ翌
朝陣中ノ馬離レ馳廻各騷シカハ清康モ庭迄
出テ下知ノ處ヘ安倍弥七郎後ロヨリ切付弑
タリ植村新六郎御刀ヲ持居シカ是ヲ抜テ渠
ヲハ仕留タリ弥七カ父大藏其罪難遁死命ヲ
賜ラント乞然ニ誤テノ儀其證拠有ヲ以此上ハ祖
父道閲ノ御ニ可任ト衆儀一決ス敵方ニハ此様
子ヲ聞テ時ヲ得タリト一揆ヲ発シ岡崎勢ヲ
襲シカトモ味方ノ兵ハ士心ヲ一ニ〆其死骸ヲ取囲
一揆等ヲ追拂ヒ三州ヘ引入大樹寺ニテ葬ル
善徳院年叟道甫居士ト謚同七日ニハ諸士思
々ニ岡崎ヘ皈タリ野伏等蜂起シテ道ヲスカラ

襲ケレハ皆開道ヲ求漸トシテ在所ヘ着タリ石川
四郎安陪四郎五郎等十日ノ暮方ニ今橋近着
タリ
清康横死ニ付テ子息仙千代ハ六歳成ヲ譜代ノ輩
取立ントス此時ヲ得織田信秀岡崎ヲ攻取ニト
同五年丙申三月初八千余兵ニテ三州ヘ打入テ
大樹寺西ニ陣取シハ仙千代幼少ナレハ名代トシテ
清康ノ舎弟松平藏人信孝同弟十郎三郎
康孝大將トシテ八百余兵伊田ノ郷近出テ陣
ヲ張必死ノ覺悟ニテ戦ハ尾張勢不堪一戦利ヲ失
本国ヘ逃皈ル味方ハ討取首百六十余級ナリ味方ニ
モ本多吉右衛門忠豊（中務忠勝祖父）林藤藏植村新藏高力
左近同息平三郎ヲ随一トシテ四十余人討取ラレ
シカ仙千代殿代ノ物始ヨシト悦タリ扱長親入道ノ
仰ニ弥七カ逆上ハ卒尓ニシテ懐中ニ大藏カ陳謝ノ状
起請文アレハ大藏ヲ厚免有テ不相替忠節可
仕ト仙千代殿ヘ被附タリ
櫻井内膳正ハ前ヨリ織田ニ通シテ謀叛シ西三河ヲ

奪取ラレト度々織田家ノ加勢ヲ得テ岡崎勢ト戦
シカトモ勝利無ヲ以テ今度思案ヲ廻シ自分ノ父ノ
道閲ハ曽孫仙千代ノ後見沙汰セルヲ訛賺仙千代ト
和睦シテ後見可仕以前ノ罪ヲ御免可有ト願ヘリ
始ハ承諾無リシカ流石ノ恩愛ニ迷藏人信孝ヲ招
是如何可有ト相談ナリ藏人心ニ不叶ト云乍ラ共
後見トシテ萬事ヲ預司ヲ以無用ト申サハ後
見ヲ争フ心ト被思事モ恥シク兔モ角モトノ返答
ニ付夫ヨリ内膳後見ニ居シカハ一族家臣皆下知ヲ
守偏ニ家人ノ如ナレハ信定權威ニ募ヲ以仙千代ヲ
害シ岡崎ヲ取レト工夫ス此企ヲ安倍大藏聞出シ
爰ニ其侭在ニハ危シト思同七年戊戌三月中旬潜
ニ仙千代殿ヲ伴ヒ勢州神戸ヘ奔走シ東條持廣ハ
ノ家ニ入テ憑居タリ此人ハ清康ノ妹聟ナレハナリ
持廣夫婦愛子ノ如シ頓テ元服セシメ德川二
郎三郎廣忠ト名乗シム翌八年己亥ノ暮
ニ（カ春）及テ大藏一人駿府ニ下向シ今川上總介義元
家臣朝比奈駿河守氏秀ニ便テ委細ヲ義元ニ

申達シ向後今川ノ幕下タラシメン御助力ヲ以櫻井ノ信定ヲ討テ本領安堵ニ於ハ織田ノ領国ヘ御先手仕是ヲ攻取御手ヲ廣セント乞義元最ト許諾ニ付大藏悦テ勢州ニ飯持廣ヘ申談シ用意シテ同亥ノ二月十七日神戸ヨリ乗船セシメ遠州掛塚迄着シ鍛冶カ許ニ上宿ス安陪四郎兵衛忠定是迄出迎夫ヨリ舊臣段々参上申此上味方ヲ催ス其始ヨリ四郎兵衛馳廻テ鵜殿十郎三郎康孝ノ随一ノ臣石川藤十郎内藤甚太郎ヲ憑ヲ以両人内證申ニ依テ最初ヨリ康孝味方トナリ

第一作兄

同弟松平藏人信孝モ共ニ心ヲ通ス康孝ニハ大上（カミ）様ト称スル母儀ヲ此動亂ノ前ヨリ人質トシテ出置シカ弥二心ナキ処ナリ最初ヨリ松平傳十郎信勝ハ参リテ味方ノ才覺ヲ廻シ松平善十郎本多猿千代坂井又十郎皆心ヲ通阿部甚五郎正宣藤井ノ彦四郎利長ハ味方トナレハ林藤助政縁カ才覚ニテ松平弥十郎中山勘左衛門築田平三郎同平九郎モ同心シ信定ノ詣衆ト称シタル大久保新

ハ成瀬藤蔵同又太郎大賀ハ孫四郎モ衛レタリ又
安陪八郎五郎天野清右衛門植村新三郎河井
隼人同半次郎中間六左衛門孫五郎八郎五郎
等モ四郎兵衛カ詞ニ同心ス斯味方ヲ相催ス其内
ハ彼鍛冶カ方ニ廣忠ハ御入ナリ扨味方余程ニ及ヒ
カトモ信定ニハ道閲ノ三男ニテ其ハ氣色ヲ取ヲ以テ
道閲ノ心ヲ傾ケ難シ其上内膳事織田信秀ノ
妹聟ナレハ威勢強ク徳川一族衆モ譜代ノ輩
モ皆軽薄スレハ今更急ニ如何共仕難シ今川義
元朝夕ニ近付其心根ヲ被窺ニ勇健ナリトテ三州
茂呂城ハ年頃義元ノ持城成ルヲ廣忠ニ進ラセ是
エ移シ追テ岡崎ヲ攻ヘシト同十年ノ七月是ヘ移
玉フ扨義元ニハ試ニ廣忠ニ大将トシテ同国吉良
城ヲ令攻城主荒川甲斐守頼時清康死後今川
ノ手ヲ離シ織田家ニ與カスル故ナリ荒川防戦
不叶降ヲ乞廣忠是ヲ免シ今川ノ手ニ属テ渠
ヲ先手トシテ同国吉田ノ城ニ押寄取囲攻動ス
櫻井信定ニハ岡崎ノ士共違心有ニヲ氣遣先近

所ニ召仕フ者ナレハ大久保新八忠利兄弟并八国
甚六詮重林藤助政縁大原左近右衛門惟宗成
瀬八郎正乗等ヲ井田郷ノ八幡社檀ノ前ニテ起
請血判セシム斯誓紙スレハ迚此輩ヲ真實ト思ヒ
櫻井ノ居所ヘ皈ル右ノ輩其誓紙ヲ捨テ廣忠
還住ノ事ヲ計ル蔵人信孝ニハ吾レ道閲ノ在居ノ
岡崎信定モ伯父ナレハ當城ニ在ナカラ是ヲ其分
ニ渡サンモ道閲ノ思召ノ憚アリ折節病氣ナレ
ハ是ヲ幸ニト湯治セシ其留主ノ隙ヲ以城ヲ可
抜取ト城門ノ鑰共ヲ右ノ六人ヘ渡シ勢海ヘ赴タリ
此時大久保新八同七郎右衛門同次右衛門同権右衛
門成瀬八国林大原等城中ニ居住シテ本丸ノ留
守居番ハ石川長右衛門康利同弟三郎四郎康
定（石川修理亮康長二男三男ナリ同四郎康蔡ノ弟ナリ）其外兵士十余人守居処ヱ
城中一味ノ輩本丸ヘ夜討シテ忽乗取ハ安倍
四郎兵衛足軽余多引具シ舎志原迄御迎ト
シテ出向天野カ人質又太郎并松平傳十郎三
人相伴櫻井ノ寺迄参リ同六月朔ノ朝廣忠

岡崎ニ皈城成テ各悦ノ眉ヲ開彼夜討ノ時本丸ノ番士石川兄弟ハ討死ス其余ハ疵ヲ蒙リ逃去タリ廣忠十七歳ニテ本主ニ立戻リ内膳事大悪ナレハ可被誅由ノ処曽祖道閲アナカチニ侘玉ヘハ無是非恩免ナリ是ヨリ藏人信孝後見ニ成テ政道ヲ取行ヒタリ

岡崎還住ノ事ヲ廣忠ヨリ石川四郎康繁ヲ使トシテ義元ヘ被告ハ義元ヨリモ朝比奈小隼人ヲ使者トシテ送リ是ヲ賀シ次ニハ三州西条吉良左兵衛佐義昭其弟東條ノ義安等以前ハ今川ノ旗下ノ処ニ近年織田ニ組シ動モスレハ東三河ノ味方ト挑戦ヘハ是ヲ攻撃シヨト今川人數ヲ差添ヘシトナリ依之廣忠大將トシテ千五百兵先西條ヱ押寄シハ東條モ西條ト一ツ手ニ成テ終日挑戦シカハ義昭ニハ深入シテ討死ス義安暫ク戦シカ不叶敗北シテ東條ニ引籠シヲ続テ押寄攻付シハ防戦盡テ降参ヲ乞此旨義元ヘ窺玉ヘハ吉良朝ニハ味方トナリ

タニハ敵ト成其心不一決今其分ニシテ差置ハ又
織田ニ被誘敵トナランノ間義安ヲ擒ニシテ駿
州ヘ差下スヘシト下知有レハ頓テ擒ニシテ被相
送ケレハ藪田ニ押籠置義安カ居城ハ吉良カ
門族西條ノ義昭ヲ（一説吉良義諦ハ今川ノ関口刑部少輔カ弟世ニ義昭ト呼ス今川ヨリ取立一向乱ノ後出奔）
城代トシテ入置渠ハ今川ノ味方トシテ変セ
ス今度モ廣忠ノ手ニ属大手ノ軍ニ戦功有ヲ
以其褒美トシテ如此此軍ハ天文十七年七月十
九日之今川義元遠州ヲハ悉討随ヘ東三河ヲモ
押領ス徳川廣忠今テハ今川ノ旗下トシテ西三
河モ相随時ニ及シカハ此上西三河ニ有処ノ織田
方ノ持城ヲ悉攻随ヱ夫ヨリ尾州ヘ討入ント
同十一年壬子八月二日遠州ノ兵ニ東三河ノ人数
ヲ加二萬余ヲ差向ケ大手ノ大將ニハ駿州臨濟
寺ノ雪斎和尚副將ニハ朝比奈備中守泰能ナリ
又搦手ハ朝比奈小三郎泰秀ヲ左將トシ岡部
五郎兵衛長教右將タリ廣忠ヘモ示合スヲ以一
族家人ヲ被催扱今川勢ハ今切本坂ヘ出張シ

勢ヲ二ツニ分テ岡部先陣ス則山中藤川ニ陣取
八日ニハ矢矧川ノ下ヲ渡上和田ニ押上リ陣取織田
信秀ニハ下威ノ嫡男三郎五郎信廣舎弟津田
孫三郎信光等ニ四千余ヲ差添エ四日ニ清洲ヲ
立テ笠寺鳴海ニ陣シ八日ニ三州安祥ニ着陣シ
上和田ノ砦ニ移リ十日ニ馬頭原ニ押出シ備ヲ立
ル信秀モ安祥迄着陣シ孫三郎軍將トシテ小
豆坂ヘ取上ントス今川勢先立テ當所ヘ出張ス
両陣間一里余ト云ヘトモ其間山路ナレハ先途見分
難ク小豆坂ヘ登ル所ニ尾張方ノ先陣行逢信秀
ノ家臣織田酒之允信房左右ヲ下知シテ味方
ノ小勢ヲ敵ニ見透サレヌ内ニ早阪ノ上ヘ押上ケテ
合戰セヨト云処エ今川勢先立テ坂ヘ押上関ヲ作
蒐下シ戰フ信秀ノ舎弟与二郎信康同四郎二
郎信實同孫十郎信次兄弟其外赤川彦右
衛門神戸市左衛門等相勵シ戰ニ付内藤藤
助能分捕ス川尻与四郎ハ伊奈某ト組テ首ヲ
得ル（時十六歳後肥前守鎮吉ト云）永田四郎右衛門重宗名古屋弥

五郎秀方以下討死武藤三位入道小瀬修理大夫直澄川崎傳助友勝土肥左衛門通平大久保半助葉忠等能相戦此大久保度々勇力ヲ顕ヲ以テ樊噲ト異名ス此戦數刻ナレハ黄昏ニ及此時今川ノ大将朝比奈小三郎泰秀一番ニ鎗ヲ合ス廣忠ノ軍兵助勢トシテ先登ニ進左右ヲ討破ルヲ以織田信秀敗北シテ其兵三町余崩テ信秀ノ旗本ヘ崩掛シハ共ニ引立被操立盗木迄引退此時津田孫三郎信光織田酒之允信房岡田助右衛門直教佐々隼人勝通同苗孫助勝豊中野曽知（此時十六歳後又兵衛忠則ト云）下方弥三郎匡範（十六歳後左近ト云）此七人一度ニ返合鎗突立ル信光信房抽テ敵中ヘ入テ働ハ残五人モ不劣ト同進テ働ハ今川方暫是ニ猶豫シテ進不得織田方是ニ力ヲ得二ノ備迄盛返敵ヲ突立ル小豆阪ノ七本鎗ト云是ナリ依之今川勢敗北ト見ヘシ処ニ廣忠ノ軍勢ノ中ヨリ林藤五郎小林源之助以下横合ヨリ馳入テ突立戦タリ是ヲ見テ岡部長教モ盛返戦ハ武藤三位ト

今川ノ小倉与助正孝ト引組三位討レタリ織田方
小勢ナレハ終ニ利ヲ失ヒ上和田ノ城ニ引入タリ安
祥要害ニハ信廣ヲ残シ置信秀尾州ヘ皈陣シ
雪斎モ朝比奈モ暫ク三州ニ逗留シテ後駿州ヘ
皈旋ス

廣忠ニハ去年辛丑正月刈屋城主水野下野守信
元カ妹娘トシテ婚禮ナリ翌十一年（壬寅）十二月
廿六日若子誕生竹千代ト名付是家康公ナリ同
十三年（甲辰）三歳ノ時御母儀離別金田惣八郎
安陪四郎兵衛送リ申水野怒テ其送輩ヲ殺
ニトス高木主水水野左近ニ三百兵ヲ添差越スト
イヘトモ彼女ノ仰ニテ早速立去リシカハ手ヲ空フス此
女阿古屋ノ久松佐渡守定俊方ヘ再嫁ナリ先
腹ニ定俊カ嫡子アリ彌九郎定通ト云アリ叔
父次兵衛十郎左衛門ト不快ニ付殺害セラル家康
公ト同腹ニテ三郎太郎康元後松平因幡守次ハ
源三郎康俊其次三郎四郎定勝後隠岐守
（初名長福）皆松平ノ姓ト成末ハ女子ニテ松平丹波守康

長ノ妻ナリ、別腹ニモ女子アリ、松平玄蕃允家清妻ナリ、佐渡守カ又ハ久松二郎左衛門定義ト云又佐渡守弟ニ久松助之丞定重、後民部少輔其ハ子ヲ惣太郎忠次ト云後彦右衛門御家ヘ後年被召出佐渡守末弟次兵衛義春其子孫松平越中守ノ臣久松清左衛門先祖ナリ末々ノ弟十郎左衛門吉次其子孫松平駿河守ノ臣久松八左衛門先祖ナリ

家康公別腹ノ御弟家元（後康元）御湯取腹ナリ十三歳ヨリ不行歩ニ付浪々ナリ（慶長八年癸卯八月十四日卒正元院悚傳宗英大居士号）御妹二人アリ、平原助之丞正次カ娘ノ腹ナリ、吉良荒川甲斐守頼持ノ妻此御妹ノ腹ノ女子（甲斐守娘）酒井備後守忠利ニ嫁ス讃岐守忠勝ヲ産ム宝鏡院ト云御妹ハ甲斐守死別シテ市場殿ト云後年筒井主殿定慶方ヘ再嫁ス御中妹ハ長沢ノ松平源七郎康高ノ妻ナリ御季ノ妹ハ櫻井与市忠正カ妻ニテ松平内膳家廣ヲ産与市カ弟与二郎忠吉ニ再嫁シ松平安房守信

吉松平左馬允忠類ニ二人ヲ産ム再後家トナリ
後年保科弾正忠正直方ヘ再ヒ嫁ス
　武田与カヲ離レ家康公ノ味方ト成ヲ以武田ヨリ
　シテ正直カ高遠ノ城ヲ攻テ其妻ヲ焼殺ス故ニ忠
　義ヲ以妻ニ賜フ

天文十四年乙巳三月廿日家臣岩松八弥不慮ニ
廣忠ニ疵付タリ植村新六渠カ逃行途中ニテ
組蔵人信孝モ来掛リ是ヲ突殺ス此科ニテ渠
カ子モ被害嫡孫六歳成ヲハ助命セシメ長袖ニセ
ヨトノ仰ニテ幸若小八郎カ舞ノ弟子ト成シ幸若
ト名乗シム後与太夫ト云其子与三太夫三列御先
祖ノ事御家人由緒迄能覚タル由秀忠公ノ上
聴ニ達シ被召出語ラセ聞召御感ノ上舞太夫御免ニ
テ御咄ノ衆ト被成法躰シ真斎ト号ス其子忠八郎
モ舞太夫御免ナリ

廣忠岡崎還住以来ハ松平蔵人信孝後見トシテ同
十郎三郎廣孝加テ政道之沙汰シ安陪大蔵正就
酒井雅楽助政親石川与七郎清兼　執事ノ如
権ヲ取雅楽助別シテ出頭ナリ大久保新八成瀬

八郎大原左近右衛門林藤助續テ抽見ヘタリ酒井左衛門尉忠次ハ一族ニシテ縁者ナレハ吾執権モ可成者ノ処ニ庶子家ノ雅樂助其職ヲ司テ渠等カ下知ヲ受事奇怪ナリト同十五年丙午三月上旬大原左近右衛門今村傳四郎等ヲ伴ヒ出テ大久保成瀬ヲ取次ニ三人執権トシテ雅意ニ募上ヲ蔑如シテ忠次如ニモ無禮ナリ傍輩等憤恨和順ノ輩ナシ雅樂助與七郎両人ニ腹切ラセ御家ヲ治メ亂ヲ鎮メシト訴廣忠卿ニ此事ヲ上テ害心ヲ挾事乱ノ基ナリ主君ノ為ニアラス早和睦セヨトノ事ナレハ是非ニ不及退出シテ夫ヨリ大原今村ヲ語ヒ三人共ニ逆心シ織田方タル上和田ノ城主松平三左衛門忠倫ニ一味シテ岡崎ヘ敵對ス又藏人信孝ニハ御一族岩戸殿死去シテ嗣子ナケレハ其領可上処ヲ自分ヘ押領シ且又三州住人板倉八左衛門頼重カ嫡子八右衛門好重頼重カ弟弾正重定同弟三次郎重宗其子主水重茲（弾正甥ニテ聟也）又好重カ嫡子木工左衛門忠重二男喜藏定重等ヲ語

ヒ家人トス三男四郎右衛門勝重ハ相傳ノ主ヲ離レ傍輩ノ家人ニ争テカ成ント廣忠ヘ奉ハス此時十郎三郎モ病死其幼子八郎三郎康定遺領ヲ賜相続ノ處ニ是モ早世シテ断絶スレハ其領モ蔵人押領ス安部大蔵ハ當時ノ家長成シカ日頃蔵人ト不快ニ付八虐ノ弥七カ父タル者ヲ老中ト称シ侍ノ座上セシムル事穢ナリト常々被申事ヲ聞テ憤思ヲ処ニ蔵人係ル二ツノ押領ヲ申立酒井石川ト申談シ謀ヲ廻シ翌年年始トシテ今川義元ヘ礼病気ニ付延引ノ儀ヲ蔵人ヲ以テ被仰ヘヲ幸トシテ各心ヲ合信孝ノ居宅三ツ木ノ舘ヲ追補其所帯ヲ没収家人等追放ス蔵人何故斯ト是ヲ糺サシト三州ニ立皈所ニ居所ニ代官ヲ被居不寄附ハ書状ヲ以訴詔有ト云𪜈是ヲ取次人ナシ今ハ為ヘキ様ナク駿州ヘ又立越エ此事ヲ義元ヘ歎ヲ以今川ヨリ岡崎ノ老臣等ヲ替々招寄セ信孝皈参ノ事ヲ廣忠ヘ異ハ見セヨトノ下知有トモ各蔵人カ我意押領ノ訣ヲ申述シカハ義元最ト諾シ其後訴詔ヲ取上無ヲ

ケレハ蔵人為方ナリシ浪〻ニシテ織田家ヘ属シ上ノ和田ヱ申通シ松平三左衛門酒井左衛門ト申談シ岡崎ヲ計ラントス蔵人ノ家人内藤甚三ノ儀（可有脱字）信孝ノ本意ニ非ス岡崎ヲ計ントノ儀不儀ナリト思シカハ大久保甚四郎ヲ頼廣忠ノ方ヘ参ル案ニ蔵人ノ子孫當時松平九郎左衛門忠利同與十郎重利等ナリ

松平三左衛門忠倫上和田ニ在住ノ処ニ織田信秀大軍ヲ差向安祥ノ城ヲ攻取嫡子信廣ヲ入置進テ佐崎ノ搆ヲ攻ントス忠倫大ニ恐信秀ノ味方ト成却テ岡崎ヲ攻ント計渡理筒針ニ砦ヲ搆人數ヲ入置信秀重テ出張ノ為トテ上和田ニ砦ヲ築忠倫ヲ入置岡ノ城ニハ蔵人信孝ヲ入置上野ノ城ニハ酒井左衛門忠次ヲ籠置岡崎ヲ一城ニシテ攻ント計ル其頃岡崎ノ士浅井半六蔵人ヘ密通シ何共シテ廣忠ヲ害スヘシ知行ノ折紙可賜ト云蔵人答テ廣忠ニ根ナシ是ヲ害ス事ヲ不思大蔵ヲ害セハ折紙ヲ可出ト有シカ𪜈大蔵ヲ討ン事不叶歟其後沙汰ナシ此事年ヲ経テ相知ケレハ浅井ハ出奔ス扨三左衛門左

衛門尉牒合天文十六年九月廿八日大軍ヲ率ヒ
岡ノ城ヨリ出テ渡理河原ニ陣ヲ取廣忠ニハ敵ニ
足ヲ溜サセナトト小勢ト云トモ彼処ニ馳向戦敵大勢
ナレハ廣忠ニモ被囲危ノ砌御油ノ松平外記忠次同
弟善蔵信次鳥居源七元繁蹈止リ力戦シ廣
忠ヲ遁サシム扨軍ハ終ニ岡崎方勝タリ外記討
死ス蔵人カ家人鳥居久兵衛従弟ナレハ是ヲ討
取其指料ノ青江ノ刀ヲ分捕セシカ家ノ重代
ナレハ外記カ子弥九郎景忠方ヘ送タリ鳥居源
七ヲハ同臣松下清兵衛討取渠ハ始外記カ譜代成
シカトモ恨有テ蔵人方ヘ往テ居タリ翌十七年故
主景忠方ヘ皈参ス此合戦信秀負タルヲ憤三左
衛門左衛門尉ニ何共シテ岡崎ヲ攻稜ヘシ然ラハ
其方等カ支配ニ與フヘシ依テ軍ヲ出サハ尾州
ヨリ加勢可遣トナレハ弥両人是ヲ計近日攻寄ント
ス廣忠ニハ重テ大勢猶向ハ事危カラン専スル処ニ三
左衛門其頭ナリト考筧平三郎ヲ招汝忠倫ト懇
意ナレハ可相計ト命ス筧畏テ上和田ヘ行安倍酒

井等ト不和ニ付立退由ヲ申忠倫幸ニ渠兄弟ヲモ招入度処ナレハ岡崎ヲ可攻討ト評定ス此年十月十八日夜又評定ノ後忠倫ニハ寝所ヘ入平三郎近所ニ伏テ扱寝所ヘ忍入忠倫ヲ二刀刺其所ヲ遁出ル弟平十郎（後助大夫）兼約ニ付城外迄来居テ同道シテ立退ハ其跡ヨリノ追手手ヲ空ス忠倫カ弟松平権兵衛重弘是ヲ口惜織田方ヘ益通シテ岡崎ヲ攻亡ントト山中城ニ取籠ル依之末弟松平左近忠親同清蔵親成同三蔵忠成并左近子宮内親乗ヲ始トシテ与力ノ輩郎等一所ニ楯籠同十一月酒井石川大久保等三百余兵ニテ山中城ヱ押寄攻ケレハ防戦不叶夜ニ入テ篝火多焼捨テ権兵衛始一族家臣不残落失セ安々ト城ハ手ニ入タリ織田信秀聞テ口惜此上ハ自身兵ヲ率シ岡崎ヲ可攻トノ支度ス此由岡崎ヘ聞ヘ今川ヘ加勢ヲ乞遣ス義元心得タリ遠州勢ヲ可遣候テ當時ノ旂味方モ更ニ憑ナレ事ヲ可疑ニ非トモ共法今ナレハ人質ヲ可賜ト答ヘラル此儀最ナレハト嫡男竹千代殿六歳ナルヲ駿州ヘ可送ト石川伯

者天野三之助上田慶宗金田宗八松平与市彼是廿
八人并阿部甚五郎正宣カ子徳千代（後善九郎）同年成ヲ伽ト
シテ被差添陸地ハ敵城多ケレハ西郡ヨリ田原ニ入リハ
船ニテ送ルヘシ幸ニ田原ノ城主戸田弾正忠憲光ハ當時
ノ舅ナレハト此処ヘ入ル義元ヨリモ迎トシテ飯尾勘助當所
迄参居スル処ニ弾正カ子五郎政光信秀カ方ヘ密通ニ
付百騎計潮見阪迄出テ是ヲ奪取御供ノ輩爰ヲ
先途ト戦シカ𪜈惣八ヲ始トシテ多ク討死ス扨竹千代君
并徳千代ヲ舟ニ乗セ熱田ヘ送リ古渡ノ城ヘ斯ト告ク
信秀悦戸田五郎ニハ青銅百貫ヲ与ヘ竹千代君
等ヲハ熱田ノ地下人加藤圖書カ家ニ置タリ高
野藤蔵ト云者常ニ来労申ス信秀使者ヲ以
御嫡子此方ニ預リタリ今川ノ一味ヲ離レ信秀ト
和睦可有是不叶ナラハ御息ノ命ヲ賜ラント廣
忠ノ方ヘ申送ト云𪜈義元ト多年ノ好不可変何
ソ一子ノ愛テ溺レテ長ク不義ノ名ヲ取ラン愚息
カ存亡其方ノ心任ニ可被致トノ返答ナリ信秀斯
ハ返答スル𪜈終ニハ愛子ニ被羈味方ニ属スヘシト夫

ヨリ名古屋ノ方松寺ノ天王坊ニ押籠置タリ人
櫻井内膳信定ニハ藏人信孝酒井左衛門尉等
岡崎ヘ反心ニ付再謀反シテ織田方ト成シ所ニ三
左衛門忠倫害ニ逢同苐等出奔ニ付内膳氣ヲ
屈スル節岡崎ヨリ櫻井ノ據ヲ可攻由聞傳大ニ
驚大樹寺ノ和尚ヲ憑佗言セリ二度敵ナレハ不
可叶ト有シカトモ和尚頻ニ佗玉ヘハ又厚免セリ藏
人是ヲ聞信定甲斐ナキ江形ナリト怒吾一人ニシテ
岡崎ト勝負セントテ岡ト三ツ木ノ両城ニ軍兵ヲ入レテ

敵對セシカトカク岡崎ヲ攻落サント五百騎ヲ引率
シ同十七年戊申四月十五日大明寺表ヘ打出陣
取タリ酒井石河二百兵ニテ馳向シカ敵大勢ナレ
ハ見繕未合戰ナシ又大久保忠勝石川新九郎ヲ
以射手七十余人勝テ差添大明寺郷ノ藪ノ陰
小塚ノ間ニ伏セ隠ス扱合戰始リ入亂戰処ニ藏人
大明寺郷ノ町屋迄引テ備テ戰ントセシ処ニ岡
崎勢二手ニ成テ攻入ハ的ニ成テ討レ信孝モ流矢
ニ左ノ脇腹ヲ被射枝馬ヨリ落テ死タリ故ニ敵

兵悉ク退散シ首百三級ヲ得テ各凱旋ス藏人討レケレハ三州ノ国士目ヲ附替岡崎ヘ属ス義元聞テ廣忠ノ軍功抜群也ト褒美シ迚モノ事ニ一国ヲ平均シ可治トニ付先安祥ヲ攻落シ信廣ヲ討取ニト同十八年己酉二月六日雪斎和尚ヲ大將トシテ五千ノ兵ヲ差向ル廣忠ニハ正月中頃ヨリ病氣ナレハ安陪正就本多忠高大久保忠利等ヲ大將トシテ三百余兵ヲ向ケラレ先岡ノ城ニ押寄攻タリ城主織田信廣防戰セシカ拘難シトテ夜中ニ潜ニ遁出安祥城ニ楯籠此由尾張ヘ聞ケレハ信秀下知シテ平手監物清秀ヲ以五百騎ニテ安祥ノ後詰セシム雪斎ニハ是ヲ聞駿遠両勢ハ城ニ向テ攻ヘシ岡崎ノ面ゝハ後詰ノ勢ヲ防ヘシトナレハ安陪本多大久保ハ平手カ陣ニ向タリ平手安祥近ク来シカトモ日既ニ暮カヽル岡崎勢ハ出向テ陣シ扣ケレハ軍ハ明日ノ事ト両ゝ陣取ラレム岡崎衆評議シテ敵ハ長途ヲ来レハ人馬労シテ今夜ハ能伏スヘシ一夜討可進ト三百

余騎相印相詞ヲ定テ丑ノ尅攻入シハ尾州勢一戰ニモ不及本国差テ逃皈此勢ニ乗岡崎方翌八日ヨリ安祥ヘ取掛二三ノ丸迄攻破ル時ニ城兵前嶋傳二郎カ放矢ニ中リ死者多本多忠高モ流矢ニ中リ忽死ス廿二歳ナリ榊原藤兵衛モ同討死セシカトモ岡崎衆急ニ攻仕大將信廣ヲ擒ニセント操立ル平手ハ夜討ニ逢シ後手勢計ニテ陣セシカ此有様ヲ見テ安陪大蔵方ヘ使ヲ立テ曰信廣ヲ助命シ被渡ハ竹千代殿ヲ送リ人質替ニセシト乞大蔵悦雪斎ニ申セハ許諾ニ付頓テ是ニ定名古屋ヨリ竹千代君ヲ迎ヘテ西野ニテ両人ヲ取替互ニ引退タリ織田玄蕃允信平同勘解由左衛門信業竹千代殿ニ添出大久保忠勝忠利信廣ヲ伴出テ取替タリ此時安祥落城ス係ル赴共ニヨツテ酒井左衛門尉大原今村ノ三人モ首ヲ延テ不義ヲ侘タリ渠等敵トハナリシカ一度敵對セス旧好有者ナレハト厚免ナリ又櫻井内膳ト大給ノ源二郎親乗（後左近共和泉守共）等ニハ日和ヲ窺居タ

リシカ今日ヲ附替岡崎ヘ追従ス其後竹千代殿駿州ヘ被送ニヨッテ天野三郎兵衛景則供申参ル義元憐ミテ宮ノ前ト云ヒ所ニ新家ヲ立置申徳千代モ相従フ御賂ニ福島土佐守正資ヲ今川ヨリ附置馳走ナリ時ニ八歳也廣忠ハ當春ヨリノ病氣重今十八年己酉六月六日逝去廿四歳ナリ大樹寺ニ葬リ瑞雲院應政道幹居士ト号ス其後慈光院ト改謚スト云（天正九年辛巳六月六日大樹寺ニテ三十三回忌アリ慶長三年戊戌六月六日五十回忌アリ家光公御代慶安元年戊子六月六日百年忌アリ皆大樹寺ニテナリ一説ニ三月六日逝去ト云）

廣忠ノ連枝ハ松平源二郎信康母ハ宮ノ善七娘成譽上人（始ハ三州大恩寺十二代ノ住持後大樹寺十四代ノ住持天正三年四月逝ス）女子母ハ廣忠ト同腹始ハ松平源七郎康高ノ妻其死後酒井左衛門忠次ニ嫁ス（於風ト云）女子ヲ産ム此女子人質トシテ今川氏眞方ヘ出ス

題岩松家ニ京兆及禮部両流事跡下曰

岩松系附録先師爲之考證其所論析可謂精確矣惟其禮部京兆分流條下増入泰家一世者蓋失諸考撿也應永廿五年申狀所謂泰家則平高時弟四郎左近太夫入道恵性初名而後曰刑部少輔時興者是也足利氏有国之日指鎌倉之時（稱先代）先師故申狀之言如此先師平生甚愼于選述援拠攷究未嘗有一事之踈漏獨此一考成於易簀數句之前豈得非其精力漸致耗衰之故耶後人幸勿以此為為議焉

享保乙巳歳　月　日　　門人平元成識

新田三家考錄　畢

內閣文庫